

『坂道のソラ』

著:朝丘 戾

ill:yoco

「そういえば、賢司さんは“首狩り坂”って知ってますか？ おぼろ坂の別名らしいんですけど」

「なに？ ずいぶん物騒な別名だね」

賢司さんが最後までとっておいたひとつだけのミートボールをくちに入れて、お弁当の包みをたたむ。俺も残ったきんぴらを食べて片づけつつ、林田から聞いた例の曰くを教えた。

簡単に説明して「霊云(うん)々(ぬん)はともかく、ストーカーって身近にもいるんだと思うと怖いですよ」と締め括(くく)ると、賢司さんが表情をなくして麦茶をすすり、

「……それ、たぶんうちの姉貴だよ」

と言った。

「え」

「死んではないけどね。この坂を歩いているときに背後から腕を切りつけられた。それが“首”になっておまけに霊になってるのか。噂って残酷だな」

亡くなっていない、と聞いて安心はした。でも賢司さんの表情はかたい。

「うちの姉貴は十九でデキ婚したんだけど、姑(しゅうとめ)にえらい嫌われていじめられて、それを俺たち家族にも黙ったまま四年間耐えたんだよ」

「嫁いびり、ですか」

「すごかったらしいよ。料理作っても不味(まず)いって騒がれた挙げ句に捨てられたり、尻軽女だって罵(のの)しられたり」

「そ、そんな嫌味を言われるんですか？」

「信じられないよね。結局子どもは流産してそのときも責められたみたいだけど、姉貴は“お義母(かあ)さんも寂しいんだ”って必死に我慢したらしい」

「酷い、お子さんまで亡くしてるのに責めるなんて……寂しさは言い訳になりませんよ」

「……ン。離婚の決定打になったのはうちの親父の病死だよ。姉貴、姑に『あんたはうちに嫁(とつ)いだんだから葬式に行く必要はない』って言われてとうとう限界がきて『じゃあ離婚させてください』って逃げ帰ってきた。でも離婚したらしたで今度は元旦那がおかしくなったんだ。で、その“首狩り坂”に繋がるんだけど——」

賢司さんが麦茶をテーブルにおいて、バルコニーの方へ視線をむける。

「元旦那は自分の母親から姉貴を守れなかつたくせに未練たらたらで、何度も実家に会いにきたし電話も手紙も凄(すさ)まじくてさ。警察も全然役に立たなくて、痺(しび)れを切らした俺が姉貴連れて実家をでたんだ。それで越してきたのがここ」

「お姉さんのために……？ 大学生になったから越したんじゃないんですね」

「うん。俺は二十歳(はたち)で大学二年だったよ。しばらくは姉貴と平穩無事に暮らしてたけど、深夜にふたりでコンビニにでかけたら、場所を突きとめて隠れてた元旦那が姉貴に飛びかかってきて——姉貴は精神病んだまま、いまでも完璧には社会復帰で

きずにいる」

年齢から計算すると十三年前のことだ。賢司さんの口調は淡々としていたものの、瞳や気配に暗い影がある。昔の出来事、で整理できていない、現在も彼にまわりつく過去。

「……すみません俺、なにも知らずに変な話をしてしまって」

賢司さんは目元の強張りをほどいて俺を見返す。

「俺が話したんだよ。さらっと言うつもりがなんだか愚(ぐ)痴(ち)っぽくなっちゃったよね、ごめんごめん」

辛(しん)気(き)臭(く)くなっちゃったなあ、と明るく笑いながら、賢司さんは液晶テレビの前へ行ってDVDをセットする。屈(かが)む彼の背中も小さく見えるほど大きな液晶テレビ。あの隅にある観葉植物はゴムの木だろうか。

この広いリビングは、ふたりでいても黙ると途端にしんとした静寂が押し迫ってくる。「俺はさ、」と賢司さんが言う。

「俺は二十歳の頃、自分はなんでもできるって信じてたんだよ。“才能がなくても努力すればなにか得られる、得られれば無駄じゃない”っていうポジティブな性格で、鬱(うつ)々(うつ)悩(なや)むだけでなにも行動にうつさない奴は怠惰で自分の幸せしか考えてないんだ、とか考えててさ」

「はい」

「それがあの一件で全部覆(くつ)がえされた。電話するといつも『結婚して幸せよ』って自慢げに笑ってた姉貴を、俺は叱りはしたけどばかにはできなかつたし、人を守るには本当に才能なんか無関係で、得られたのも後悔だけで、全然、ちっとも前向きになんかなれやしなかつたし……すごい息巻いて実家を飛びでたのにな。『俺が姉貴を守ってやる！』なんて母親に宣言して」

昼間もらった言葉が脳裏を掠(かす)めた。

『言わない覚悟をしたら同時に、相手を求める権利も失うんだよ。我慢は溝しかつくらない』

お姉さんのことでもあったんだろうか。家族に言わない、と我慢する覚悟をしたお姉さんは、賢司さんやお母さんに対して“痛みに気づいてくれない”と責める権利も、“助けてほしい”と請(こ)う権利も失って気丈に耐えていた。家族とお姉さんのあいだにできてしまった深い溝。

そんなお姉さんを救うために、賢司さんはここへ連れてきて自分が怪(け)我(が)をさせてしまった、と思っているのだ。さっきアパート暮らしをばかにされると言っていたけど、とどまり続ける姿に暗い後悔を感じるのは気のせいだろうか。

自責で己を苛(さい)なむためにここにいる。忘れないように。自分で、自分を許さないために。

「だからこう……俺は幸せな結婚して、幸せな家庭つくって、母親に孫の顔を見せて安心させてやらないといけないなって思うんだけどね」

「……はい」

小さく咳(せき)払いして、賢司さんが横に戻ってくる。

「ごめんね。話をするようになって間もないのに、いきなり打ち明けることじゃないよね」

「いえ」

俺を見つめて賢司さんは微苦笑した。

「一吹、左腕に傷があるでしょう？」

「え。あ……はい、あります」

「夏服の時期に気がついたよ。そのとき姉貴を連想して、傷痕を隠しもしないで堂々としてる一吹が印象的で、じつを言うと結構特別な気持ちで気にかけてたんだよね。俺は一吹と、姉貴のことや一吹の腕の傷の話をしたかったのかもしれないな」

慌てて両手を振る。

「俺のは全然たいしたことじゃないんです。うちは父親が暴れる人だったんでちょっと怪我もしましたけど、とっくに離婚してるから」

「暴れるってDV？」

「いえ、DVは大げさですよ」

「かなりざっくり切れてたし、大げさじゃないと思うけど」

「傷だけ大げさなんです」

苦笑いして否定しながら、傷や状況だけを話すと深刻に感じられてしまうことに心底困る。

いつもこうだ。母さんも俺も父さんを恨んでいるわけじゃないとどれだけ説明しようとも、相手は俺の奥に苦悩がひそんでいるに違いないという哀れんだ顔をする。表情で“辛かったのね、話してもいいのよ”と訴えてきて暴こうとさえする。暴けるものなんてなにもないのに。賢司さんが抱えている痛みとも比べものにならないほど軽傷なのに。

「賢司さんも深刻にならないでください」

「父親を嫌いたくないの？」

「嫌ってないですよ」

「子どもに手を上げるような父親なのに嫌ってないって……？」

眉(まゆ)をひそめて顔を近づけてくるから、思わずそらして伏せてしまった。

「俺じゃなくて母親に辛くあたってたんです。とめようとしてあいだに入ったら、たまたま手が滑って、父親も傷ついた顔をしてたし、」

ふ、と賢司さんが停止した。

「一吹はちゃんと、守れたのか……」

失言だった。真っ先にそう思った。けれど賢司さんはまたすぐ表情を緩めて肩を落とし、

「俺が一吹に惹かれるのは当然なんだな」

とからっと笑う。左頬のえくぼがわずかに崩れた、哀しげな笑顔。

「ありがとう。一吹に聞いてもらってよかったよ」

撫(な)でるように肩を叩かれた。

「姉貴の子が生まれてれば一吹と同じ年だったから、こうして横に座って一緒に話していると、その子が男で甥っ子だったならこんな感じだったのかなって考えるよ。一吹みたいにお母さんを守る立派な子に育てくれたかな。……だといいな」

微笑む賢司さんの目元が泣きそうに歪む。……甥っ子。

光栄な、言葉のはずだった。でもその瞬間胸を貫いたのは、確かに冷たい絶望感だった。

「そうだ一吹。俺と一吹で、どっちが先に彼女をつくれるか競ってみようよ」

「彼女……ですか」

「競うって表現はよくないか。要はお互い恋愛に目をむけて、一緒に自分を変える努力をしていこうってこと」

「恋愛をして、自分を変える努力……」

「うちは母親がまだ姉貴のことで沈んでるから安心させるためにも結婚相手を探し、一吹も人付き合いの苦手意識を克服して信じ合える彼女をつくってごらんよ。一吹が同じ目標を持っていてくれると、俺もいままで以上に真剣になれるから」

信じ合える彼女と、母親も安心させられる結婚相手。

賢司さんは一(いつ)切(さい)の邪(じゃ)気(き)なく微笑んでいる。いい提案をした、お互いに幸せになれるはずだ、ここから人生をやりなおせる、と一ミリも疑っていない笑顔。

「……はい。わかりました、努力します」

どうして俺は、賢司さんに拒絶されたような気分になっているんだろう。

本文 p63～70 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>